

うたとかたりの対人援助学

第3回 アイヌの<イタッラマツ (言霊)>

鵜野 祐介

はじめに

ここ4ヶ月ほど、英国スコットランド出身のマンローという医師のことを考えてきた。昭和の初め、北海道・二風谷のアイヌ村落に日本人看護師の妻と共に移住し、10年にわたって無償で医療活動を行う傍ら、アイヌ文化の調査研究に心血を注ぎ、この地で没した彼は、何故アイヌ文化に魅かれたのだろうか？その理由を19世紀後半における祖国スコットランドの思想史的潮流に求めて論文にまとめる作業を数日前にようやく終え、今もまだその余韻の中にいる。

この作業に取り組みながら、私自身は何故アイヌ文化に魅かれるのか、思いを巡らせていた。白沢ナベさんにお会いし、はじめてアイヌのうたやかたりに触れてから28年経った今も、折に触れてアイヌのうたやかたりの文化とその背景にあるコスモロジー（宇宙観）のことを考えている。私にとって、アイヌのうたやかたりの魅力とは何か、この機会に問い直してみたい。

白沢ナベさんとの出会い

先ほども述べたように、はじめてアイヌの語り部・白沢ナベさんの方にお会いしたのは今から28年前の1989年夏のこと、当時大学院生だった私は、京都女子大学教授だった故稲田浩二先生と京女のゼミ学生10数名に同行して北海道の白老を訪れた。たしか現地の公民館のよう

な所で、ナベさんからカムイユカラ（神謡）やウエペケレ（散文説話）などの「かたり」をいくつかお聴きした後、どのような事情だったかは憶えていないがイフムケ（子守唄）を聴かせていただいた。唄の中で、「ルルルッ」と舌を震わせて出す音が繰り返し用いられた。ナベさんによれば、これは鳩の鳴き声を模倣したものだという。何とも不思議な響きだった（幸いにも、この子守唄の録音テープは今も手許にある）。

その当時はまさか自分が3年後にスコットランドの子守唄と出会い、子守唄研究がライフワークになろうとは思ってもいなかったが、もしかしたら「ハーメルンの笛吹き男」の話のように、あの時の「ルルルッ」という不思議な調べに魅せられて、ここまで歩んで来れたのかもしれない。

『語り合うことばの力』でナベさんと再会

ところで今回マンロー研究に関連して中川裕さんの『語り合うことばの力 カムイたちと生きる世界』（岩波書店 2010）という本を読んでいたら、ナベさんの名前が出てきて驚いた。中川さんには、昨年（2016）夏に北海道大学で開催された日本口承文芸学会の年次大会で、二風谷アイヌ文化博物館などを案内していただきお世話になったのだが、ナベさんは中川さんにとって恩人ともいべきアイヌの語り部だ

ったことが記されていた。おふたりのツーショット写真から、ナベさんのお顔も思い出すことができた。この本によると、ナベさんは 1905 年、千歳市蘭越のお生まれで、1993 年に亡くなられたそうである。ということは、私がナベさんにお目にかかったのは彼女が亡くなる 4 年前、84 歳の頃だったということになる。

ナベさんの記憶力を育んだもの

この本の中から彼女を紹介した箇所を引用しておこう。「白沢ナベさんも、両親が流暢なアイヌ語の話し手であったばかりでなく、兄や姉も数多くの伝承を覚えていた人であるという。(中略) ナベさんはおよそ学校というものについて通ったことがなく、家族に囲まれて少女時代を過ごした。そして、同世代の他の人たちと違って、父である小山田サンレキテ氏や姉アサ氏から「お前がアイヌ語を残せ」と言われて育ったという人である。この『目に一丁字もない』と言われるような経歴の人の、すばらしい記憶力と、頭の回転の速さ、そして言葉に対する確かな説明能力に、多くの研究者が大変な恩恵を受けた」(中川 2010:6)。

「そうした古老と呼ばれる人たちと話をしている、いつも感じる圧倒感は、その人たちの記憶力のよさである。(中略) 白沢ナベさんは、小さいころの思い出をよく語ってくれた。三歳の時に、家族で丸木舟に乗って千歳から下流の馬追というところに行った時、お父さんが舟ペリを竿でたたきながら、『私たちは舟に乗ってまいります。家族連れだって舟に乗ってまいります。水の神様、私たちを守ってくださいませ』と、アイヌ語で言ったことも、しっかり覚えているという。(中略) 夢の中で父親が言ったことばの意味を説明してもらったりもした。それがみな五十年以上も前に見た夢だと言う」(同上 8)。

このような驚くべきナベさんの記憶力は、アイヌの人びとが文字を持たなかったことと関係しているのではないかと中川さんは見る。「本を読んだり、ビデオやDVDで同じ映像を何度も再生して見ることに慣れた我々は、その瞬間に頭に入らなくとも、もう一度見ればよいと考えてしまいがちである。しかし、そういう文化の中に育っていない人たちにとっては、その瞬間を逃したらそれまでであって、同じ人から同じ話を聞く機会はまだ二度とないと考え。そのような気持ちで人のことばを聞くことによって培われた力が、記憶する力となっているだろう」(同上 9)。

モーラクさんから教わったこと

中川さんの指摘を読んで思い出されるエピソードがある。1992年夏、スコットランド北西部のバラ島で 80 代半ばの女性モーラク・マッコウレイさんにゲール語(ケルト系言語)の子守唄を聴かせていただいた時のこと。一度歌っていただいた後、「メモを取りたいので歌詞を教えてください」とお願いしたところ、「メモは取らないで」と拒否された。私の英語力のせいで意図がきちんと伝わっていないのかもしれないと、もう一度お願いすると、「記録しないで覚えなさい」と言われた。それから1フレーズずつ、彼女にゆっくりと歌ってもらい、その後を繰り返した。ことばの意味もわからないまま、彼女の歌をひたすら真似た。音程や発音がちがうと彼女がもう一度そのフレーズを歌ってくれ、それを真似て歌った。それから 20 分近くをかけて、ようやく2番まで歌えるようになった。

その3年後に再びバラ島を訪れた時、モーラクさんはすでに亡くなられていた。あれから 25 年が経った今もこの唄を誦んじることができるのは、ひとえに彼女のレッスンのおかげである。

アイヌの「イタクラマツ(言霊)」

中川さんも書いているように、文字を持たない人びとにとっては重要な情報を耳にしたら、その場で覚えるしか手がない。常に出会いは一回きり、「一期一会」なのである(同上 9)。

だが、文字や記録媒体を持っている者にとっても、人と人が出会うところで営まれるうたやかたりの場とは、そういうものなのではないだろうか。歌い手や語り手は全身全霊を込めて歌い語り、聴き手は一心に耳を傾ける。本来「聴く」(listen)という行為は、単に音声情報が感覚神経によって受信されることを意味する「聞く・聞こえる」(hear)とは違い、音声情報の「受け手」である主体の能動的な意志が働く時にはじめて成立する。簡単に言えば、「送り手」が魂を込めて発した言葉を、魂を込めて受けとめようとするのが「聴く」という行為なのだ。

そして、アイヌの人びとは言葉それ自体にも魂があると考えて、「イタクラマツ(言葉の魂)」と呼んだ。日本語でいう「言霊(ことだま)」である。

アイヌの醜名(しこな)

かつて日本には「捨吉」や「糞丸」などといった、幼名をわざと醜い名前にすることで子どもが神様にいたずらされるのを防ごうとする、「醜名」と呼ばれる習俗があったが、アイヌにもかつて同じような習俗があった。

アイヌの人びとが子どもに名前を付けるのは、6,7 歳ぐらいになってからのことで、それまでは「アイアイ」(赤ちゃんの泣き声)、「テンネプ」(おしっこやうんちをもらしてお尻が湿っている)、「シオンタク」(腐った糞の塊)などと呼んでいた。「何でこんな名前で呼ぶのか」というと、悪いカムイに魂を持って行かれないように

するため(同上 210)だという。また赤ん坊がくしゃみをした時に唱える以下のようなおまじないもあった。「チェシオロポイポイエ(うんちまみれにしたよ) シ チコトウイトウイエ(うんちをふりかけたよ)」。これもまた悪いカムイに「そんな汚い赤ん坊なら近づくものか」と、去ってもらうためだという(同上 106)。

見方を変えれば、それぐらい多くの子どもが病気や事故ややむを得ない事情で亡くなっていたということであり、親や周りの大人たちが何とかして子どもの命を守ってやろうとしたことの証しでもあるのだろう。

「あなたの心にふれさせていただきます」

私が大好きなアイヌ語に「こんにちは」を意味する「イラムカラプテ」がある。直訳すると「イ(あなた)ーラム(心)ーカラプ(ふれる)ーテ(させる)」、つまり「あなたの心にそっとふれさせていただきます」、それが「こんにちは」なのだ。まさに「一期一会」という、出会い、つながることの有難さを噛みしめる時に生まれた、つつましい優しさに満ちた言葉である。

あるアイヌの女性が^{あつし}厚司(樹皮衣)織のためにオヒョウニレの木の幹から皮を剥いだ時、剥ぎ取った皮の一部を幹に巻き付けて「イヤイライケレ(ありがとう)」と唱える場面を、以前テレビ番組で観たことがあるが、この習俗もまた、相手が人間であれ人間以外のものであれ、自分にとってかけがえのない存在のラマツ(魂)に対して、魂を込めた言葉(イタクラマツ)を届けることで、相手とつながり合い、支え合おうとするアイヌの人びとの自然観やコスモロジーを表わしているように思われる。

そこに、アイヌのうたやかたりの魅力の秘密があるのではないか。これからも、ライフワークとしてこの研究に取り組んでいきたい。